

# 国語科指導案

東大阪市立義務教育学校池島学園

授業者 吉本 茜

1. 日時 令和7年11月19日(水) (13:40~14:30)
2. 場所 7年2組教室
3. 学年・組 7年2組(41名)
4. 単元(題材)名 いにしへの心にふれる 蓬萊の玉の枝―「竹取物語」から (使用図書:光村図書)

## 5. 単元(題材)の目標

- ・音読に必要な文語のきまりや訓読のしかたを知り、古文を音読し、古典特有のリズムを通して、古典の世界に親しむことができる。〔知識及び技能〕
- ・文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えを確かなものに行うことができる。〔思考力、判断力、表現力等〕
- ・言葉がもつ価値に気づくとともに、進んで読書をし、我が国の言語文化を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする。〔学びに向かう力、人間性等〕

## 6. 生徒観

個人情報が入るため、記載していません。

## 7. 教材観

「竹取物語」は「源氏物語」の中で、「物語の出で来はじめの親」と記されており、現存する日本最古の物語文学と言って差し支えない作品である。この最古の物語は、現代まで千年以上も読みつがれてきている。生徒の中には、子供向けの絵本などで、かぐや姫の物語に接した者も多く、生徒が興味を持つ教材である。中学校で初めて本格的に古典教材を学習するにあたり、幼い頃に昔話として親しんだかぐや姫の物語を繰り返し音読し、古典特有のリズムに親しむとともに、古典が現代に生き続けていることに気づいて欲しい。

本教材は、五人の貴公子たちのかぐや姫への求婚と失敗、帝の求婚に対するかぐや姫の拒否、かぐや姫の昇天(月への帰還)を描いている。五人の貴公子はそれぞれ難題を与えられて、求婚に失敗すること、貴公子たちとは異なり、帝はかぐや姫と文通する関係になったことを踏まえて原文に触れられるように構成されている。「その中に、この取りてまうで来たりしは、いとわろかりしかども、のたまひしに違はましかばと、この花折りてまうで来たるなり。」「御文、節の薬の壺並べて、日をつけて燃やすべきよし仰せたまふ。」など、原文には、かぐや姫が帝や貴公子から深く愛されていたことが伺える。この原文に触れることを通し

て、今も昔も変わらない人の幸せや愛情に気づき、古文の世界に親しみを感じることができる教材である。

竹取物語で昔の人の価値観や考え方を学ぶ。そこには、現代の価値観や考え方と共通する部分や異なる部分があるだろう。そこから、生徒自身が自分の考えを持ち、現代の生活における物事の感じ方などに生かしてほしい。

## 8. 指導観

これまで、国語科では、根拠となる本文の叙述をもとに考えを伝え合うことを意識して学習に取り組んできた。物語では、比喩表現に注目し学習し、伝え方の工夫を学習してきた。また、説明文では、筆者の主張と根拠の関係に注目し、伝え方の工夫を学習してきた。加えて、教科書から学んだことをもとに、自分の考えを根拠を明確に伝える手段として、三角ロジックを用いて思考し、伝える学習を行ってきた。

第1時では、古典の基本的な知識について学習し、繰り返し音読する。その際、歴史的仮名遣いに注意しながら音読する。第2時では、図書やタブレットを用いて「竹取物語」に関する事柄を調べ、調べたことをまとめて班で意見を共有する。調べる観点や見本はあらかじめ用意しておくことで、生徒が取り組みやすくする。第3時では、竹取物語の本文について物語のあらすじを理解し、古典の世界に親しむ。その際は第2時で調べたことも参考にすると、本文内容がより深まると考える。第4時では、「かぐや姫にとって、天上(月)と地上のどちらの世界が幸せか?」について、言語活動として三角ロジックを用いて考える。三角ロジックを用いて、主張、根拠、理由づけを明確にして自分の意見を論理的に考えさせる。本単元を通して、生徒が自分の考えを論理的に整理し、表現できるようになる力を育成したいと考えている。第5時では、「竹取物語」が伝えたいことを考え、現代との違いやつながりを考える。これまで学習してきたことを振り返ったあとに考えさせることで、より学びが深まると考える。

## 9. 単元と特につながりのある「中学校区におけるつきたい力」

つきたい力	
発信する力	自ら題材を決め、情報を整理し、根拠をもとに表現することができる。
つながる力	自他の違いに気づき、認め合い、尊重することができる。
協働する力	役割を果たし、考えの違いを尊重しながら、仲間と協力して課題を解決できる。

## 10. 単元の評価規準

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
単元の評価規準	音読に必要な文語のきまりや訓読のしかたを知り、古文を音読し、古典特有のリズムを通して、古典の世界に親しんだり、理解したりしている。	「読むこと」において、文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えを確かなものになっている。	進んで音読し、今までの学習を生かして、描かれている古典の世界を想像しようと自ら粘り強く学習に取り組んでいる。

## 11. 単元の指導と評価の計画(全5時間)

時	学習内容	主な評価規準〔観点〕
第1時	○古文の基本的な知識(歴史的仮	音読に必要な文語のきまりや訓読のしかたを知り、

	名遣い・文末の言葉・言葉の意味の違い)について学習する。 ○「竹取物語」の概要をつかみ、リズムを味わいながら繰り返し音読する。	古文を音読し、古典特有のリズムを通して、古典の世界に親しんだり、理解したりしている。【知識・技能】
第2時	○図書やタブレットを用いて、「竹取物語」に関する事柄について調べ、新聞にまとめる。 ○調べたことについてのスライドを作成し、班で発表する。	竹取物語について自らの疑問を探求し、図書やタブレットを用いて粘り強く取り組もうとしている。【主体的に学習に取り組む態度】
第3時	○教科書本文を読み、全体のあらすじを理解する。	古典の世界に親しんだり、理解したりしている。【知識・技能】
第4時 (本時)	○「かぐや姫にとって、天上(月)と地上のどちらの世界が幸せか？」について、三角ロジックを用いて考える。 ○自分の考えを他者に説明する。	三角ロジックを用いて、文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えを確かなものになっている。【思考・判断・表現】
第5時	○「竹取物語」が伝えたいことを考え、現代との違いやつながり学ぶ。	文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えを確かなものになっている。【思考・判断・表現】

## 12. 本時の展開

### (1)本時の目標

- ・文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えを確かなものにできる。【思考力、判断力、表現力等】

### (2)本時の評価規準

- ・文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えを確かなものになっている。【思考・判断・表現】

### 評価基準

評価 A(十分満足できる)	評価 B(満足できる)	評価 B に達していない子どもへの支援
文章を読んで理解したことに基づいて、現代につなげながら自分の考えを確かなものになっている。	文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えを確かなものになっている。	文章をよく読み、天上(月)の世界と地上の世界の違いに注目させ、自分の考えが持てるように促す。

(3)本時の学習過程

時間	○学習内容・学習活動	予想される子どもの反応	●指導上の留意点 ◎評価規準(評価方法)
導入	・「竹取物語」のあらすじを振り返る。		
展開	<p>・「かぐや姫にとって、天上(月)と地上のどちらの世界が幸せか？」について考える。</p> <p>・三角ロジックを活用して、「かぐや姫にとって、天上(月)と地上のどちらの世界が幸せか？」について隣の人に説明できるようにする。</p> <p>・自分が考えた「かぐや姫にとって、天上(月)と地上のどちらの世界が幸せか？」について隣の人に説明する。</p>	<p>・天上(月)か地上かどちらかを選び、ワークシートに記入する。</p> <p>例 「地上」</p> <p>・主張 かぐや姫にとって、地上のほうが幸せである。</p> <p>・根拠 教科書 P160「その中に、この取りてまうで来たりしは、いとわろかりしかども、のたまひしに違はましかばと、この花折りてまうで来たるなり。」</p> <p>・理由づけ かぐや姫の無理難題に必死に応えようとしていた。そのくらいかぐや姫は愛されていた。</p> <p>・他者の意見を聞くことで、自分の考えをより深めることができる。</p>	<p>◎文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えを確かなものになっている。【思考・判断・表現】(ワークシート)</p> <p>●「根拠」:教科書の原文を書くように伝える。その際、第2時で調べた「竹取物語」に関する事柄を参考にしてもよいが、それのみを「根拠」とすることのないように留意させる。</p> <p>●「理由づけ」:「根拠」から分かることを「理由づけ」に書くように助言する。</p>
まとめ	・ふりかえり	・ロイロノートに送られてきたシートにふりかえりを記入する。	<p>◎文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えを確かなものになっている。【思考・判断・表現】(ワークシート)</p> <p>●「交流を通して、気づいたことや考えが深まったこと」について記入するように助言する。</p>